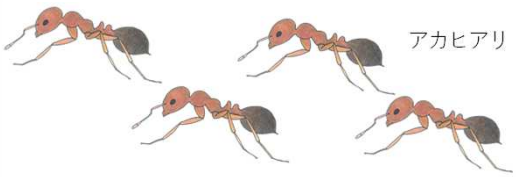
TOYOSANGYO INFORMATION
東洋産業だより
June
2023.06
Vol. 233
バックナンバー掲載中

輸入品とともに持ち込まれる虫



新型コロナの行動制限が緩和され、レジャーにも行きやすくなりました。中には海外旅行を計画している人もいるのではないでしょうか。

特定外来生物を国外から持ち込むことは法律で禁止されていますが、虫の場合、卵が製品に付着していたり、製品の中に幼虫が潜んでいたり、製品包装やコンテナそのものの隙間に潜んでいたということがあります。意図せず輸入品とともに持ち込まれてしまうことがあるのです。

実際に海外で製造された木製の製品が消費者の元に届いた際に、キクイムシによって製品が穴だらけにされていた事例や、プロテインバーの中に虫の卵が混入しており、日本に輸入後たくさんの幼虫が孵化していた事例があります。海外では虫は食べても人体への影響はなく殺虫剤が混入するよりはましだという考えもあります。日本人との価値観の違いを感じますね。

海外に生息している虫の多くは、日本の気候や温度では生きていくことが出来ず、定着することは多くありませんが、温暖化の影響などで日本国内にも定着し始めた種類の虫もいます。昨今では、ヒアリやアルゼンチンアリ、セアカゴケグモなどが有名です。外来の虫の中には毒をもっていたり、凶暴性が強いものもいたりしますので注意が必要です。

製品やその原材料を輸入されている場合、製品に混入してしまった虫が日本で混入したのか、海外で混入したのかを知りたいというご依頼が弊社宛によくあります。その場合、その虫がどんな虫なのかを同定する必要がありますが、国内の虫に比べ海外の虫は知見や文献が少なく、種類まで同定することが困難であるため、ＤＮＡ検査を推奨しています。

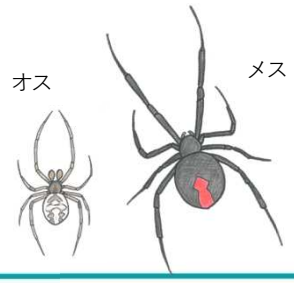
ＤＮＡ検査ではその一致率が高い虫の種類まで科学的に同定することができるので、製造時期や虫の生態と照らし合わせて、日本での混入なのか、海外での混入なのかを判断することができる可能性があります。虫の同定だけではなく、いつどこで混入してしまったのか、お客様と情報共有をしながら考察していくこともできます。お困りのことがあれば、なんでもご相談ください。

今月の豆知識　セアカゴケグモに要注意

「セアカゴケグモ」という名前を一度は聞いたことがある人が多いのではないでしょうか。その名の通りメスは腹部に赤い模様があり、とても目立つ風貌をしているので分かりやすいです。オスはメスに比べて小さく、地味な色合いなので一見して他のクモと見分けるのが難しいですが、噛みつくのはメスだけです。セアカゴケグモは、人工物に潜んでいることが多く、日当たりのいい暖かい場所に置いてある物の陰を好みます。排水溝の側面や蓋の裏、コンクリートのへこみや隙間、プランターや花壇、自動販売機の裏などに潜んでいます。また、長期間放置していた自転車のサドルの裏から出てきたということもありますので、そういったものは要注意です。

セアカゴケグモは、特定外来生物なので、生きたまま別の場所に移動させることが法律で禁止されています。場所によってはすでに定着し、屋外で普通に見られるようになっているところもあります。見つけた際は素手で触らず、家庭用殺虫剤を吹きかけたり、靴で踏みつぶしたりして対処しましょう。毒をもっているため危険な生物ではありますが、とてもおとなしく、襲ってくることはありません。

噛まれてもスパイダーマンにはなれませんので、むやみに触ったり、刺激をしないようにしましょう。



©2023 TOYO-SANGYO.Co.Ltd